

た ち ば な



目次

センター長より ご挨拶	1
研究者になる！ ー第1回ー (松下佳代先生)	2
学童保育アンケート 結果ダイジェスト	3
データで見る女性の 躍進 (伊藤公雄先生)	4
病児保育室を 開室します	4

センター長より ご挨拶

女性研究者支援センター長
医学研究科教授 塩田浩平

女性研究者支援センターは、9月5日に発
足以来、京都大学構成員をはじめとする多
くの皆様の御支援によって順調に運営が進
み、4か月の間にいくつかの事業を行うこ
とができました。

10月9日には、センター設立記念シンポ
ジウムを時計台記念館ホールで開催し、1
20名を超える学内外の研究者、学生、市
民の参加がありました。シンポジウムで
は、講演、パネルディスカッションが行わ
れましたが、会場からも質問や意見が出さ
れ、活発な討論が行われました。当セン
ターの発足については各方面からの反響も
大きく、センター発足を新聞各紙が報じた
のに続いて、10月26日には稲葉推進室長
がKBSラジオの番組に出演して電話インタ
ビューを受けました。

センターでは登谷特任教授と2名の事務
担当者（その後3名に増員）が中心にな
り、各種事業の立案・推進と、関連各方面
との折衝に当たっています。尾池総長と役員
会、京都大学事務当局のはからいによっ
て、春までにはセンターの拠点となる独立
した建物を設置できる方向で、現在作業が
進められています。また、本モデル事業の
目玉の一つであった病児保育について、内
山附属病院長をはじめとする病院スタッフ
の全面的協力のもとに、病院外来棟に病
児保育施設を開設できる運びとなりました。
2月初めの開所を目指して現在準備が
進んでいます。

その他、出産・育児・介護などで研究を
中断せざるを得ない女性研究者が研究・実
験補助者を雇用する時に、その給与を当セ
ンターが補助する制度もスタートしまし
た。去る12月に公募を行ったところ、多数
の方から応募があり、選考の上、15名の利

用者を決定しました。

その他4つのワーキンググループがそれ
ぞれの担当プロジェクトを推進していま
す。例を挙げると、京都府や京都市と協調
しての女子高校生・車座フォーラム、専門
カウンセラーによる相談・カウンセリング
事業などがあります。後者については、予
想以上の利用者がありますが、このこと
は、女性研究者が様々な問題や悩みを抱え
ている現状の表れでもあると思われます。

女性研究者が自らのキャリアを考える
時、同じ女性研究者の仲間や先輩研究者と
のネットワークが極めて重要です。その手
始めとして、12月6日には教育学部・教育
学研究科で、女性教員、院生、学部学生な
どが参加して、女性研究者の座談会が開か
れました。身近な問題点についての個人的
な体験談なども含めて活発な意見交換がな
され、若手女性研究者や女子学生が先輩研
究者と交流を深める貴重な機会となりました。
この様な交流の機会を今後、各学部・
研究科、また全学レベルで順次開催してい
く予定です。

女性研究者支援センターでは、これまで
の数か月間は、どちらかといえば立ち上げ
のための懸案処理にかなりのエネルギーを
費やしてきましたが、センターの拠点が完
成する2007年春以降は、本格的にセン
ターの各種事業を具体化していくことを目
指しています。

新しいセンターとして発足以来、尾池総
長はじめ役員会、各部局、附属病院、事務
当局の多くの方々に様々な御支援をいた
だいてきました。ここに改めて御礼申し上げ
るとともに、京都大学における女性研究者
の研究環境が改善され、女性研究者数がさ
らに増えて活動できるよう、引
き続き京都大学構成員の皆様に
御支援と御協力をいただきます
ようお願い申し上げます。



病児保育室 開室

2007.2.5より
京大病院内に
病児保育室を
開室します

病中、病後のお子様
に対し、常駐の看護師・
保育士が保育を行いま
す。

ご利用の前に必ず事前
登録をしてください。



連載：研究者になる！－第1回－

迷いながら研究者

地域連携事業ワーキンググループ推進員
高等教育研究開発推進センター教授

松下 佳代



「研究者になる！」という連載の第1回の執筆者に、私はまったくふさわしくない。「研究者になる！」というフレーズからは、若いうちに研究を志し、それに向けて確固とした信念のもと歩んできたというイメージを受けるのだが、私の歩んできた道のりは、迷い道さながらだったからだ。

私は、1979年に京都大学教育学部に入學した。もともと教育学部に決めたのも二次試験の願書を出す直前で、人間を相手にするような学問が学びたいという漠然とした思いからだった。小・中と高校とでかなり異なる学校経験をしたことから学校教育に問題意識をもち、教育方法を専攻することにしたものの、大学卒業後の進路でまた悩んだ。大学院を出て研究職につくというのは憧れだったが、「OD（オーバードクター）問題」の深刻さ、とくに女子院生の就職の困難さなどを見聞きすると、とてもやっていける自信はなかった。4年生の頃は、企業に就職するか、大学院に進学するか、二転三転しながら、就職活動と卒論の準備を続けていた。やっと結論を出したのは、内定をもらった会社のアルバイト研修に通っていた2月のことだった。「途中で挫折しても、自分がやりたいことだったら悔いはないんじゃない？」という年上の友人の言葉に、ずっと非常勤講師のままかもしれないけれど、何とか食べてはいけるだろう、とにかくやってみよう、と覚悟を決めた。

1988年の3月末、博士後期課程を終えると同時に、私は研究室の先輩だった人と結婚し、夫の勤務地である金沢に移り住んだ。研究室を遠く離れ、アパートの四畳半の自室にこもって研究を続ける生活は、このまま主婦という日常の中に埋没してしまうのではという不安とあせりをかき立てるものだった。家賃8千円という破格に安い下宿を京都に借りて、月の3分の1は京都で過ごしてエネルギーを蓄え、その余勢で金沢での残りの3分の2を乗り切るという期間が続いた。

長いOD生活は、公募に出しては落ちるということの連続だった。ゆうに20回以上は繰り返しただろう。考慮の末応募することを決め、淡い期待を抱いて公募書類を準備し、2ヶ月、3ヶ月とその結果を待ち、「ダメだったか」を自分をあきらめさせて気を取り直した頃に、書類が送り返されてくる——「残念ながら貴殿のご意向には添えませんでした」。その間に、友人や後輩は次々に就職していった。いま振り返っても、よく乗り切れたと思う。精神的・経済的に支えてくれた夫、暖かく見守ってくれた両親、励ましあい知的刺激を与えあった研究仲

間、そして同じ困難を経験してきた先輩女性研究者たち。こうした人びとのおかげで、私は何とかキャリアをあきらめずにすんだ。

OD生活7年めも終わりにさしかかった1月のある日、就職の機会は突然訪れた。出身研究室の助手の職だった。経済的に自立し、自分のオフィスがあり、周囲には研究する雰囲気がある。任期つきではあったが、職につくということ、そして京大という環境のありがたさを身にしみて感じた。2年間の助手時代を経て、群馬大学教育学部で教育内容・方法学担当の助教授を5年間つとめた後、2002年に現在の職場にポストを得て再び京都の地に戻ってきた。

女性が研究者になるということ。結婚し子育てもしながら研究者を続けるということ。私が長いOD生活を送らざるをえなかったのは、何も女性で既婚者だったことだけが要因ではない

だろう。研究テーマ・業績、年齢、学閥……。さまざまな要因が関与しているに違いない。とはいえ、最終的に公募で常勤ポストを得ることのできたのは、就職での性差別がまったくないところだった。

当時に比べると、現在は就職での性差別は大幅に軽減されてきている。私が兼任する教育学研究科でも、私の院生時代にはたった1名だった女性教員が、現在は34名中10名にものぼっている。しかし、その一方で、OD問題、PD（ポストドクター）問題は、大学院重点化による院生数の増加と大学経営難によるポストの減少・流動化によって、当時以上に深刻化しているように思われる。どんな問題でも、弱者にそのしわ寄せがいくものだ。就職上の性差別がいくら軽減されても、OD問題、PD問題が深刻化すれば、女性がそのしわ寄せを受けるおそれは大きくなる。

女性研究者支援センターは女性研究者（研究者を志す女性たち）を包括的に支援するために作られた機関だ。私の院生の頃には、「女性は男性の3倍努力しないと認められない」と言われた。だが、男性研究者だって必死なのに、そんなことは無理だし、そもそもおかしい話だ。男性とそれほど変わらないくらいの努力で、女性が研究者になり、女性としての生き方を犠牲にしないで研

究者を続けられる。しかも、その努力が自分や周りの家族の自助努力だけでなく、公的な援助によって支えられる。女性研究者支援センターの活動が、そうした私たちの願いを現実化する手助けをしてくれることを希望してやまない。



学童アンケート結果ダイジェスト

センターの活動プログラムの1つに、女性研究者の多目的スペースの設置があります。

多目的スペースでは、女性研究者同士の交流や学生・院生を交えた交流、育児のための空間の確保、子どもや児童の保育のための空間の確保と種々の活動に使用できるようにと考えていますが、今回は学童の保育に対してどのような形態のニーズがあるかを知るためのアンケート調査を、ネットで皆様にお願ひしました。たくさんの方にご協力を頂いたことを、この場を借りてお礼申し上げます。

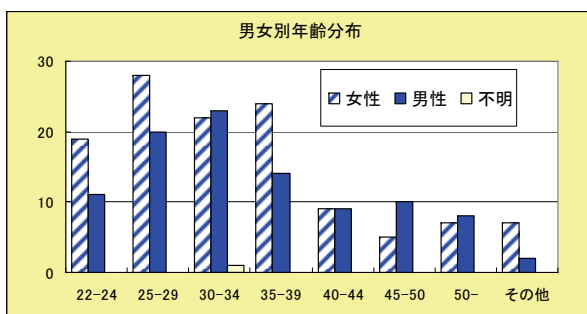
その結果は、センターのホームページで報告していますが、ここでは、その概要を報告します。

実施期間：2006年10月9日～10月24日

対象：京都大学に籍をおく教員、研修員（研究生）、大学院生など研究に従事している方々

方法：メールによる全学文書配布ネットワークを利用
回答者数：219名

(1) 回答者の男女別年齢分布



(2) 回答者の子供の状況

① 子供の有無

	男性	女性	小計
有	49	42	91
無	48	77	125
有の割合	50.5%	35.3%	42.1%

② 子供の数

子供の数 (人)	0	1	2	3
人数	126	42	39	10

(3) 京都大学が学内の教職員児童対象の学童保育システムを、京都市学童保育時間を補完するような形で、設置することに意義があると思いますか？

1. 意義がある (194名)
2. どちらともいえない (19)
3. 意義がない (5)

(4) モデルプランの保育時間帯は、京都市の学童保育が終了する18:00以降に設定されています。この保育時間帯は適当であると思いますか？

1. 適当である (76)
 2. 放課後時間から始めて欲しい (114)
 3. 終了時間をもっと遅くして欲しい (8)
- 複数選択 (11)

(5) (4)で2 または、3と答えた方は、適当とお考えになる保育時間帯(開始時間と終了時間)とその理由をお書き下さい。

開始時間[14時(10)、15時(59)、16(20)、その他(19)]
終了時間[19時(10)、20時(23)、21(55)、22時(9)、その他(4)]

理由(代表的な意見)

- ・市と大学の学童保育の二重利用では、保護者には費用の、子供には、移動の負担がある
- ・4～6年生の児童は、市の学童保育の対象外であり、18時までの居場所がない
- ・市の学童保育は、希望者が多く、利用できるかどうかかわからない
- ・学校の授業の短縮期間や長期休暇期間における対応も考慮してほしい

(6) 保育対象を、「小学校6年生まで」と、通常の学童保育の対象者(小学校3年生まで)よりも広げています。この保育対象者の設定は適当であると思いますか？

1. 適当である (190)
2. 適当ではない (14)

(7) 京大吉田キャンパス内(或いは周辺)に京大が学童保育施設を設置した場合、利用を考えられますか？

1. 是非、常時利用したい (5)
2. 常時ではなく、必要な時だけ利用したい (22)
3. モデルプランに改良が加えられれば利用したい (6)
4. 利用したくない (2)

センターでは、皆様の回答をもとに、多目的スペースの利用形態を審議しました結果、まず、研究会、シンポジウム、国際会議参加などのための、「学童の一時預かり」事業を出発させようという結論になりました。

実際のご利用は、建物の改修工事終了後になりますが、完成の暁には、是非、ご利用ください。



データで見る女性の躍進

広報事業ワーキンググループ主査
文学研究科教授 伊藤公雄

本センターの設立の大きな契機になったのは、2005年12月に閣議決定された政府の男女共同参画基本計画（第二次）である。政府与党の一部からは、大学も含む教育の場での「ジェンダー」という用語の使用禁止を要求する動きが出されるなど、ジェンダー平等政策へのバックラッシュ（逆流）の動きのなかで、この基本計画はまとめられた（ちなみに激しいバックラッシュの動きにもかかわらず、これまでの政府のジェンダー平等政策の基本線を継承した計画になっている。また、当然のことながら、ジェンダーについてはきちんとした定義の上での使用の方向であることが確認された）。

今回の基本計画には「新たな取組みを必要とする分野」として、「科学技術」「防災」「まちづくり」「観光」「環境」があげられている。なかでも、「科学技術」分野への女性の参画拡大は、ひとつの目玉になって

いる。というのも、日本社会は、他の諸国と比較したとき、この分野での女性割合が極端に低いからだ。たとえば、経済の発達した諸国の国際的機関であるOECD（経済開発協力機構）のデータによれば、加盟30カ国の大学における女性教員割合（2003年版）は、平均で36%であるが、日本は最低の14%である（ちなみに日本の次に低いのは韓国で、25%強）。もっといえば、京都大学の場合、国際的にも最低レベルの日本の平均の半分程度ということになる。

すでに東京大学などは、こうした状況を改善すべく、女子高校生対象の進学セミナーを開始したり、さらには女子大合併を視野にいれて動き始めているようだ（『エコノミスト』、07年1月11日号での小宮山総長のインタビューなど）。

他大学の動きにふりまわされることはないが、京都大学も本センターの活動を軸に、京大スタイルでの女性研究者支援の仕組みづくりが本格的に進められる必要があるだろう。

病児保育室を開室します

2月5日より、病児保育ワーキンググループで検討を重ねてきました「病児保育室」を、京大病院内に開室します。

京都大学で働き・学ぶ女性なら、どなたでも利用できます。

利用の前に、事前登録が必要です。また、利用には、利用料が必要です。

詳しくは、利用の手引きをご覧ください。利用の手引きは、ホームページ（http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/byoji/byoji_top.html）からダウンロードできます。

＜京都大学女性研究者支援センター 病児保育室＞

開室時間	平日8:15～19:00
保育児童	生後6ヶ月から 小学校3年生までの 病中、病後児
利用定員	5名



Center for Women Researchers

〒606-8501
京都市左京区吉田本町（本部棟2階）

電話 075（753）2439
FAX 075（753）2436
Email: cwr-admin@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
HP: <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>

お知らせ

研究会「女性医師・研究者を支援してゆとりある医療を実現する」

2007.1.24 17:00～19:00

医学部A棟1階103、107教室

どなたでも、参加いただけます。

女子高生・車座フォーラム2007「研究者の仕事って何？」

2007.2.3 12:30～16:30

西園寺公望京都別邸「清風荘」

女子高生の皆さん、ご参加ください。

ニュースレター愛称募集への応募をいただき、ありがとうございました。センター移転先住所の「吉田橋町」より「たちばな」に決まりました。今後も「たちばな」をよろしくお願いいたします。